

にいがた老舗物語

確かな職人仕事 小島塗装店 (上越市) 2

戦後復興で仕事増加

世界恐慌が吹き荒れた昭和初期。高田の街も不況に襲われ、小島外吉が請け負っていた漆塗りの仕事も急激に減った。この時期、外吉は弟子3人とともに長野県の岡谷、諏訪方面へ出稼ぎに行っている。木曾漆器が盛んな地域だったからだ。

具体的にとどのような仕事をしていたのか、詳細は定かではないが、孫で3代目社長の清介さん(76)は外吉の弟子から「塗りの技術が生かせると思ったのではないかと聞いたことがある。

また外吉はもともと、長野の人たちとの結びつきを強めるべきだと考えていたようだ、と清介社長は話す。「祖父は『新潟は遠い。長野の人たちと交流を深めれば、高田のまちは発展するはずだ』と口癖のように話していた」

1926(大正15)年7月、外吉は当時10歳の長男を病気で亡くした。5人目の子どもにして初めて授かった男の子だった。「後継ぎだ」と、将来を楽しみにしていた外吉の精神的ショックは大きく、1カ月近く仕事に手が付けられなかつたという。

このとき外吉の仕事を支えたのが、清介社長の母親で、外吉の四女アヤノだった。当時12歳のアヤノは仕事を父の背中を見て育ち、実際に仕事を覚えるのも早かった。客の評判もよく、「外吉並みに腕がよい」といわれていた。

社長は推察する。戦時中は外吉の稼ぎのほか、アヤノが農家や旧家で仕事した際に工賃代わりに頂いた食料で飢えをしのいだこともあったという。

終戦翌年の46(昭和21)年、外吉は仕事の大半をアヤノに任せるようになっていた。この時、30歳を過ぎたアヤノは、この間に結婚し、1人息子の清介社長を出産したものの、夫を早くに亡くしていた。弟子も独立しており、一家の生活はますますアヤノの双肩にかかっていた。

戦後復興に合わせて仕事が増えた。板戸や帯戸の漆塗りのほか、机や椅子などの木製家具にニス塗る仕事も次々と舞い込んだ。

アヤノは職人としても一流だったが、人当たりの良さ仕事に対する誠実さで多くの客に慕われ、取引先も増えていったという。

新築住宅分野にも拡大

50年代になると、高田では合板スキーが盛んに生産されるようになった。アヤノは、スキー板の滑走面にニスを塗って修繕する仕事も積極的にこなした。高田にはスキー工場専用の塗装

清介社長は60年に、外吉の友人の塗装業者から仕事の協力を頼まれる。それが新築住宅の内外装の塗装だった。「10万円が入金された。大金も得られ、魅力的な仕事だと思った」と清介社長。以降、建築塗装は清介社長、家具のニス塗りはアヤノ、漆塗りは外吉という分業体制ができた。家業は好景気の波に乗った。

当時、地元の定時制高校に通っていた清介社長は、屋間は祖父と母の仕事を手伝っていた。

55年ごろから、日本は高度経済成長期に入る。上越地域でも住宅着工が増えていったが、家具は木製に代わってスチール製も増え始め、ニスを塗る仕事は頭打ちになった。



当時高校1年だった小島清介さん(前列中)と創業者の外吉(後列左)、清介さんの母アヤノ(前列右) 11954年



漆塗りの仕事で小島外吉が愛用したヘラ(左)と、はけ